



北方民族博物館だより

No.127



E747 体鳴楽器 ウイルタ 網走 1960年代収集
27.5x8.8x2.2cm

ウイルタ語で「ヨードプ」という。かつてはシャマン儀礼に先立って、女性たちが手に持って踊った。両手に一本ずつ持ち、叩き合わせて音を鳴らす。丸い部分は木の枠組みに獣皮や魚皮（本資料の場合はトナカイ皮）を張った、いわゆる「でんでん太鼓」のような構造になっており、中に豆や小石が入っている。シャマニズムが廃れてからは、民族芸能における踊りの小道具となっている。本資料は、第二次世界大戦後にサハリン（樺太）から網走に移り住んだウイルタが製作したものである。

目次 Contents

- 1 表紙 体鳴楽器
- 2-4 第36回北方民族文化シンポジウム 網走
北方諸民族文化とジェンダー
- 5 講座「古代岩画に魅せられた人々：アムール川流域・ナーナイの暮らしと文化」
／講演会「美術史からみた先住民アート」
- 6 講座「湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査について」
／講座「奥尻島のオホーツク文化」
- 7 ロビー展「西田香代子アイヌ刺繍展」
／講習会「アイヌ刺繍講習会」
- 8 INFORMATION



第36回北方民族文化シンポジウム 網走 北方諸民族文化とジェンダー

2022.10.15-10.16

今年のシンポジウムは、北方諸民族文化における伝統的なジェンダーの在り方やその歴史の変遷、現状と課題をテーマとしました。以下に各発表の概要を報告します。

【第1部】ジェンダー研究の歴史と展開

「フェミニズム、ジェンダー研究とインターセクショナルティ：「女性」概念をめぐって」

(宇田川妙子氏/国立民族学博物館)

フェミニズムおよびジェンダー研究は、多くの批判や再検討を経て現在に至っている。なかでも女性カテゴリーの安易な一般化・普遍化に対する批判をめぐっては、多くの議論が交わされてきた。そして近年は、インターセクショナルティ（複合差別）という語とともに、ジェンダーという問題の実態には、人種、民族、階級、年齢などの他の差異が複雑に絡み合っていることが注目されている。一方、女性カテゴリーやジェンダーを、多様性という観点から再考すること自体にも問題があることが指摘されている。

本発表では、こうした議論の変遷を追うとともに、それがジェンダーに限らず他の差異の問題にも通底する課題であることを指摘した。



宇田川妙子氏

「北米先住民研究におけるジェンダーとセクシュアリティ」 (佐藤円氏/大妻女子大学比較文化学部)

北米先住民社会におけるジェンダーやセクシュアリティの研究は長く停滞していた。それは史料がヨーロッパ系の人びとによって記されたものに限られていたこと、研究者が先住民男性ばかりに注目し、先住民女性の社会的地位や役割を軽視してきたこと、さらに先住民のセクシュアリティに対して関心を払ってこなかったことに起因する。

このような状況を打破するため、歴史学者や人類学者は新史料の発掘、学際的研究手法の導入、史料の再解釈などの努力を重ねてきた。本発表では、こうした研究史をたどりつつ、植民地化以前・以後の北米先住民社会におけるジェンダーやセクシュアリティの多様性について、近年明らかになってきたことを紹介した。



佐藤円氏

【第2部】北アメリカの事例

「カナダの先住民女性たちの現在」

(矢内琴江氏/長崎大学ダイバーシティ推進センター)

カナダでは、同化政策によって先住民やコミュニティが被害を受けただけでなく、今なお何世代にもわたる暴力の連鎖が続いている。特に先住民女性たちは、非先住民の白人女性と比較して3倍の暴力被害を受けている。さらに2010年代以降、先住民女性の行方不明や殺害が社会問題として認識され、2019年、カナダ政府の調査委員会は、先住民女性と2SLGBTQQIAの人々を含む先住民に対する暴力を「ジェノサイド」と結論づけた。

本発表では、ジェンダーと植民地支配の視点から、今日のカナダにおける先住民女性の抑圧的状况について述べると同時に、先住民女性たち自身による傷の回復と抑圧状況の変革に向けた取り組みについて紹介した。



矢内琴江氏

「生きる技術としての「メディシン」：ユーコン先住民の超自然的な実践におけるジェンダー」

(山口未花子氏/北海道大学大学院文学研究院)

発表者は2005年からカナダのユーコン先住民と動物の関係に関する研究を続け、先住民の生活を支える技術として、様々な場面で超自然的な実践がみられることを示してきた。しかしこうした実践は、民族誌にみられる1950年代の状況とは異なることがわかってきた。特に強い超自然的な力を持つ「メディシン・マン」と呼ばれる者が、かつては男性に偏っていたが近年は女性に多いという点、動植物に対するタブー、動植物のメディシンに対する観念などが大きく変化したように思われる。

本報告では、こうした変化の要因として、先住民社会におけるジェンダー役割の流動性、定住化に伴う生業活動や社会関係の変化、調査者のジェンダーの影響を挙げ、それぞれについて検討した。



山口未花子氏

【第3部】アイヌの事例

「アイヌのジェンダーを再考する」(北原モコットウナシ氏/北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

現在のアイヌは、日本社会における人権意識の浸透や、フェミニズムの波を経験している。特に文化復興運動では、地域の女性が大きな役割を果たしてきたが、その一方で、伝統的とされる文化には随所にセクシズムがみられる。例えば宗教儀礼や公式のスピーチ、芸能の実演など、威信をともなう行為は男性が担うとされる。また、生業のなかでも、漁労と狩猟には女性が立ち入りを許されない領域が多い。こうした女性排除の論理には、男性中心的な感覚、身体的・道徳的ミソジニー(女性嫌悪)、ジャイノフィリア(女性羨望)など複数の要因が影響を与えていると考えられる。

本発表では、こうしたアイヌの「伝統的」なジェンダー規範が、日本の近代化に際して流入した西欧文化の影響によって急激に強化された可能性について検討した。



北原モコットウナシ氏

「アイヌ・アートの現在：創造と享受をジェンダーの視点から考える」(池田忍氏/千葉大学大学院人文科学研究院)

近代化の過程で日本には「美術」と「民族資料」、「美術」と「工芸」という分類が導入された。その結果、アイヌを含むマイノリティや女性による造形表現は美術の枠組みから排除され、周縁化されてきた。

歴史的にアイヌ社会では性別分業がおこなわれ、造形表現については、男性は木彫り、女性は糸に関わる手仕事を担うとされてきた。しかし、この分業は必ずしも固定的ではない。現代のアイヌの表現者たちは、「先人たち」との繋がりを求めて創作、表現活動に従事する過程で、新たな造形作品を生み出してきた。

本発表では、現代の「アイヌ・アート」の表現者とその活動を紹介しつつ、ジェンダーや民族など、さまざまな属性の関係性のなかで表現される造形活動について検討した。



池田忍氏

【第4部】シベリアの事例

「カモフラージュの色はいくつ? : ロシアの資源豊富な開発地域における男性性と超男性性の規範と思想」(ヨアヒム オッター ハベック氏/ハンブルク大学民族学研究所)

2000年代初頭以降のロシアでは、軍での愛国教育を通じ、男性的なヒーロー像が育成されてきた。一方、中央から遠く離れた厳しい環境で狩猟・漁撈・トナカイ牧畜を生業とする北方先住民は、強い男性性を持つという「伝統的」なジェンダー規範を保持していると考えられている。

北方先住民の多くは、野外活動の際に迷彩(カモフラージュ)柄の衣類を身に着けている。獲物から身を隠すため、また安価で汚れが目立たないからである。しかし迷彩柄は、同時に戦争や男性性とのつながりを想起させる。

一方で、「カモフラージュ」には、隠遁や秘密、忌避という意味もある。この迷彩柄の衣類や時に超男性的な行為は、求められる社会的規範とは異なる感情、劣等感や同性愛を隠すための戦略とされているのかもしれない。



ヨアヒム オッター ハベック氏

「歪んだ鏡のなかで：シベリア先住民における非異性愛規範的なジェンダーとセクシュアリティの形態の民族誌的表象」(ステファン デュデック氏/タルトゥウ大学 北極研究センター)

シベリア先住民のジェンダーとセクシュアリティに関する文化人類学的研究は、地理的・物理的な決定要因の探求に関する道徳的評価から、社会的・文化的条件の議論へと変化してきた。一方、それらに携わってきた研究者の視点は、自身の社会的・政治的・ジェンダー的立場の影響を受けており、民族誌的表象もその立場を反映させた「歪んだ鏡」となっていた。

本報告では、シベリア先住民のジェンダーに関して、異性愛規範から外れた生き方の解釈の歴史的変遷について検討した。我々は過去の民族誌に示されたテキストを通して先住民の現実の一部を見ることができる。しかしその際には、研究者の位置、研究者と地域集団との関係性を考慮した新たな見方を導入すべきである。



ステファン デュデック氏

本シンポジウムは、3年ぶりに対面式での開催となりました。ドイツからお越しいただいたお2人を含めて8名の専門家にお集まりいただき、2日間にわたってジェンダー論、歴史学、教育学、文化人類学などさまざまな視点から報告いただきました。

会場では、各報告に対して多くの質問やコメントがあり、例年以上に熱心な討論がおこなわれました。新型コロナウイルスの発生以前は当たり前だった風景ですが、発表者と質問者が直接討論する場の大切さを改めて感じました。

なお、今回のシンポジウムは、オンライン式も併用しました。遠方にお住まいの方も気軽に参加いただけるためか、オンラインでは会場よりも多くの参加者がありました。ただ、両方式の併用は初めてだったため、進行の難しさや音声の乱れなど、いくつか課題も見つかりました。

会場・オンラインを合わせ、今回のシンポジウムには2日間でのべ161名の方に参加いただくことができました。

(学芸グループ 中田篤)



会場の風景

講座

古代岩画に魅せられた人々： アムール川流域・ナーナイの暮らしと文化

2022.9.4

講師：井出晃憲氏（フェリス女学院大学非常勤講師）

本講座では、シカチ・アリヤン村（ロシア連邦ハバロフスク地方）に居住するナーナイの暮らしや文化、および同地の古代岩画群について紹介いただきました。多くの写真や映像、実物（工芸品など）を用いたわかりやすい解説に、参加者はうなずきながら傾聴していました。

シカチ・アリヤン村は、ハバロフスク市からアムール川を約70km下ったところに位置する、人口約350人の村です。住民の多くがナーナイで、1万2千年前のものともいわれる古代岩画群を有することで世界的に知られています。

講師がシカチ・アリヤン村を初めて訪ねたのは1995年、文化交流のためでした。その後、2008～2016年にかけて日本で古代岩画の展覧会を実施するために複数回訪問しました。展覧会は2015年度に国立民族学博物館・新潟県立歴史博物館・横浜ユーラシア文化館で開催されました。

シカチ・アリヤン村の古代岩画群は100点以上が確認され、その規模は世界遺産級ともいわれています。ナーナイの祖先が制作したわけでもなくとも、ナーナイは自分たちの土地に残る古代岩画群を大切に守ってきました。現地に伝わる神話や民話には岩画の影響がみられるといいます。村が岩画群を管理できるようになった2007年以降、村人たちの手によって保存が進められています。

本講座は、昨年度に当館で開催したロビー展「A. V. スモリヤーク写真展 ロシアの民族学者がみた1950～70年代のナーナイの暮らし」の関連事業となる予定でしたが、新型コロナウイルスのまん延防止のために延期され、このたびようやく実現したものでした。写真展で紹介した年代と本講座で紹介された年代には半世紀ほどの開きがありますが、例えば民族衣装やミオ（廟）信仰に共通点が見られました。ソ連期から近年まで、伝統的な文化を伝え残そうとするナーナイの人びとの姿勢を、古代岩画保存の取り組みと合わせて、垣間見ることができました。



講座で紹介された古代岩画の一つ。「内臓まで描かれたオオシカまたはヘラジカ」だという（井出晃憲氏撮影）

（学芸グループ 山田 祥子）

講演会

美術史からみた先住民アート

2022.9.25

講師：大下裕司氏（大阪中之島美術館学芸員）



特別展「イヌイトの壁掛けと先住民アート」の関連事業として、大阪中之島美術館の大下裕司学芸員に、美術史の視点から先住民アートについて講演いただきました。

はじめに、特別展で展示している壁掛けを三点選び、西洋美術でみられる遠近法が用いられていないこと等、イヌイトの独自の表現法を指摘されました。

日本国内の先住民アートに関わる作家として、砂澤ビッキ、藤戸竹喜、床ヌプリ、宇梶静江、川村則子、チカッパ美恵子、結城幸司、マユンキキラをあげました。彼らの作品をひとつくりにアイヌアートとして扱うことはせず、各人の作品の特徴と、芸術的歩みをそれぞれ紹介されました。例えば床ヌプリの巨大な木彫レリーフは、彼が関わった舞台美術の影響をみることができます。

イヌイトの壁掛けのような、布と糸を使った作品は、世界的にみてもやはり女性作家のものが多く、女性と針仕事とのつながりを示されました。例えばサミのアーティスト、ブリッタ・マラカット＝ラッパはサミの苦難を伴った歴史を23mにもわたる刺繍作品で表現しています。

このほか同じくサミのハンス・ラグナル・マンセンは、地名が置き換えられた土地の地図を、先住民がよんでいた地名にして描くことで、その土地が本来誰のものであったのかを訴えています。カナダの北西海岸インディアン（ファーストネーションズ）のボウ・ディックは、伝統的な仮面を作成する技法を用いた作品をうむ一方で、インスタレーションの要素も含み、先住民アートの概念を広げています。

先住民アートが世界的に重要な展覧会でも紹介され注目を集めていることや、この先の先住民アートへの期待を述べて、講演を締めくくりました。

（学芸グループ 笹倉いる美）

講座

湧別町シブノツナイ堅穴住居群の調査について

2022.11.6

講師：林勇介氏

(湧別町ふるさと館 JRY・郷土館 学芸員)

今回の講座では、湧別町ふるさと館JRY・郷土館の林勇介学芸員から、同町に所在するシブノツナイ堅穴住居跡の調査と展望について解説いただきました。

シブノツナイ堅穴住居跡は、昭和41年の発掘調査で堅穴住居跡の数や分布状況、年代が明らかになり、翌昭42年に北海道の史跡に指定されました。しかし平成21年の湧別・上湧別両町の合併後、シブノツナイ堅穴住居跡の保護と活用を推進してゆくうえで、遺跡の内容が十分に把握されていないことが再認識されました。



林勇介氏

シブノツナイ堅穴住居跡の内容を明らかにするため、湧別町は平成30年から計画的に発掘調査を実施しています。講座では、湧別町の発掘調査の成果を紹介しながら、「そもそも堅穴群、堅穴住居とはどんなものか」、「北海道の堅穴群にはどんな特徴・価値があるのか」についてお話いただきました。

内容は、①北海道の堅穴群と固有の文化、②堅穴住居の構造、③湧別町の発掘調査、④堅穴群の魅力と今後、でした。また、放射性炭素年代測定の結果など、現在分析中の事柄についても速報いただきました。



会場の様子

(学芸グループ 種石 悠)

講座

奥尻島のオホーツク文化

2022.11.13

講師 種石 悠 (当館 学芸員)

本講座では、今年度の考古資料の調査研究業務として行った、北海道南部、奥尻島のオホーツク文化調査の成果について解説しました。調査では、奥尻島のオホーツク文化遺跡である宮津遺跡と青苗砂丘遺跡の現地確認を行い、両遺跡から出土した資料を観察しました。

宮津遺跡は島の東海岸にある岬の先端にあり、北側は湾のようになっています。漁を行い、また船を扱う上で、非常に便利な立地にあります。



会場の様子

青苗砂丘遺跡は、奥尻島の南端、青苗岬の東岸にある砂丘上の遺跡です。ここから、オホーツク文化期の堅穴住居跡と墓が発見されました。遺跡の目の前は青苗湾です。こちらも、オホーツク文化人たちが生活を営む上で申し分ない立地です。

次に、調査で明らかになった奥尻島のオホーツク式土器の特徴について解説しました。

オホーツク文化期の初め頃から中頃までにあたる、十和田式土器から貼付文土器の前半段階までの時期に、施文具を器面に対して斜めに押し付けて付ける文様が多くみられることがわかりました。これは、奥尻島のオホーツク式土器の特徴と考えられます。また青苗砂丘遺跡には、定住性をうかがわせる堅穴住居跡や墓が造られています。

これまで、奥尻島は礼文島をはじめ道北部やサハリン島に母村をもつ集団の夏季キャンプ地だったとする意見がありました。しかし、この説は成り立ちにくいのではないのでしょうか。実際、オホーツク文化期に季節移動を行う母村になりうるような人口規模をもつ大型の集落跡は、道北部やサハリン島にみることはできません。奥尻島は他地域に住むオホーツク文化人の季節的キャンプ地ではなく、道南部日本海側地域におけるオホーツク文化期の定住的な拠点のひとつだったと推測されます。

(学芸グループ 種石 悠)

ロビー展

西田香代子アイヌ刺繍展

2022.10.29-12-11

講習会

アイヌ刺繍講習会

2022.11.30

釧路市阿寒町で民芸品店を営みながら、アイヌ刺繍の伝承に50年以上携われてきた西田香代子氏のアイヌ刺繍作品を紹介する展覧会を開催しました。西田氏の刺繍作品は高く評価され、数々の賞を受賞し、北海道アイヌ協会の優秀工芸師としても活躍されています。後進の指導にも熱心にあたってられました。



会場の様子

西田氏が刺繍をはじめたのは23歳のときで、姑と地域の女性から指導を受けたといいます。オリジナル文様の作品づくりのほか、先人の技をより学ぶために博物館等が所蔵する着物の複製品の制作にも力をいれてきました。自分が作ったものならみんなに自由に触ってもらって、アイヌ刺繍のことをより知ってもらうことができるからとの思いもこめられています。当館が現在所蔵する2点の資料の複製も手がけられています。

作品と一緒に、西田氏の言葉も紹介しました。「アイヌ刺繍をする場合は、たいていは身に着ける人がわかっている。だから相手のことを知って、その人のことを思いながら針をすすめることになる。どのように相手を考えているのか、それは刺繍に表れてくる。」

「布でも糸でも針でも、誰かが作ったものを自分は使っている。だから作品を自分一人で仕上げたという気持ちにはならない。私が刺繍を続けてこられたのは、いろいろな

人に助けられたから。謙虚でいなければならない。自分がさまざまな人に教えてもらったから、自分が成長した姿をみてもらうことが先人への恩返し。」

展示会場には西田氏の教えを受けた人たちの作品も展示しました。西田氏から教え子にむけての言葉は「一つ一つマスターしてから、次の段階へステップアップすること。こっちで少しかじって、あっちで少しかじってというようなのはだめ。人を優しく想う気持ちがなければ、優しい線にはならない。はっとさせるほどの温かみのあるものは、優しい心がつくる」でした。

着物のほか、かばんや脚絆、はちまきや、糸巻きや針入れのような道具や植物素材標本も紹介しました。来館者は木綿糸や絹糸のほか、自ら撚ったイラクサの糸で刺繍された着物に感嘆され、西田氏が刺繍の針をすすめる様子が紹介された『技vol.6』（公益財団法人アイヌ民族文化財団）の映像にも見入っていました。

本展の開催にあたりましては、公益財団法人アイヌ民族文化財団、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、山崎幸治氏をはじめ、大勢から協力をいただきました。

会期中の関連事業として、西田氏を講師にアイヌ刺繍の講習会を開催し、ブックカバーを作成しました。当館でのアイヌ刺繍ブックカバーづくりは3回目になります。これまで西田氏の指導で、ルウンペ、カバラミプの技法を学び、今回はチンヂリ（註）に挑戦しました。チンヂリは糸のみで文様を表します。

西田氏にデザインしていただいた文様をあらかじめ紺木綿布に描いて準備しておきました。参加者はこの線の上をアイヌ語でオホカラとよばれるチェーンステッチしていきます。先端からではなく、カーブの緩いところから縫いはじめ、二本の刺繍線が並ぶときには、上下（あるいは左右）で進む方向が異なることなどに気をつけながら刺繍を行いました。

西田氏の丁寧なご指導により全員が時間内に完成させることができ、参加者のみなさんは満足げでした。



参加者の作品

註）アイヌ刺繍の技法の名称は地域によって異なり、同じ名称でも違う技法を指すこともあります。

（学芸グループ 笹倉いる美）

ロビー展 オホーツクシリーズ16「北の状況から」

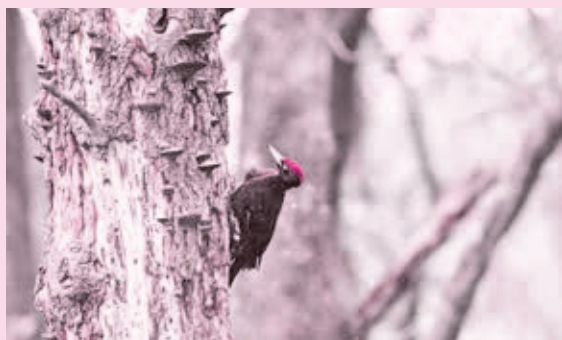
オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の16回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

■会期：令和5年(2023年)1月4日(水)～1月22日(日)

■会場：北海道立北方民族博物館・ロビー

■主催：北海道立北方民族博物館

■観覧：無料



「一心不乱」 撮影：伊藤博己

企画展「川と魚と北方民族」

北方諸民族にとって、川に生息する魚は重要な資源となってきました。北太平洋沿岸地域では、産卵のために大量に遡河するサケ類の利用に適した生活が営まれてきました。また、オホーツク海にそそぐアムール川の流域では、魚皮を衣類などの素材として活用する文化が高度に発達してきました。

本企画展では、これらの地域を中心に、河川における漁労文化を紹介します。

■会期：令和5年(2023年)2月4日(土)～4月2日(日)

■会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室

■主催：北海道立北方民族博物館

■協力：標津サーモン科学館

■展示資料：漁具、魚皮製品、舟、民族衣装など、100点程度

■関連事業

講座「映画「オビ川の秋」から知るハンティの暮らし」

2月4日(土)10:00-11:30 講師：大石侑香氏(神戸大学)

講座「北の川の魚たち」

3月12日(日)10:00-11:30 講師：市村政樹氏(標津サーモン科学館)

上映会 北方民族博物館シアター冬

3月26日(日)10:00-11:30 解説：中田篤(当館)

INFORMATION

行事報告

◆8月21日(日)上映会「北方民族シアター夏」(解説：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆9月10日(土)はくぶつかんクラブ「ビーズ織りでつくるキーホルダー」(講師：平栗美紅解説員)を開催しました。



作品を手にする参加者

◆9月17日(土)講座「特別展解説講座」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。



解説会の様子

◆9月20日(火)第36回北方民族文化シンポジウムの関連事業として嵯峨治彦氏・孝子氏による語りと音楽のユニット「野花南」をお招きし「野花南 馬と砂の幻燈音楽会～馬頭琴とサンドアートパフォーマンスの共演～」を開催しました。

会場：オホーツク文化交流センター



コンサートの様子

◆10月22日(土)はくぶつかんクラブ「動物ししゅうのブックカバー」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。



上手にできたね

◆11月3日(木・祝)北方民族博物館文化の日イベントとして「第14回モルック大会」、「はくぶつかんクイズ」を開催しました。



大会の様子

職員の異動

[退職]令和4年(2022年)9月30日
山田祥子(学芸員)

[退職]令和4年(2022年)12月9日
種石悠(学芸員)

北方民族博物館だより No.127

令和4年(2022年)12月20日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会